

1976. 7

5月の26日、ハイデッガーは86年の生涯を閉じた。新聞の報道によれば、彼の死去はメスキルヒの町役場から発表され、死去を報ずるテレビ・ニュースも10秒たらずであったという。われわれ日本人には意外と思われるような、こうした報道がかえって、後年素朴な生活のなかで、ひたすら「存在」を思索しつづけていたハイデッガーにはふさわしいことのようにも思えてくる。

ハイデッガーが主著『存在と時間』（1927年）を刊行したのは40才にみたない時であったが、この著作は当時の思想界の形勢を瞬く間に一変させたといわれている。しかしこの著作も第一部第二編までが出版されただけで、第一部第三編と第二部は結局未刊に終わった。というよりもハイデッガー自身後半部の公表を断念したために、この著作は未完のまま独立した著書として歴史の試練をうけることになったのである。

ハイデッガーがまだ思想形成期にあった当時、フッサールは哲学を厳密なる学問であるとして、どこまでも理性主義の立場を貫ぬこうとしていた。こうした立場に立つフッサールから、ハイデッガーは現象学について多くのことを学んだ。しかし若き彼の心を奥底でとらえていたのは、なんといっても西洋哲学の底流に脈打っていた生哲学の問題であった。やがて彼はフッサールの本質学とは逆に「事実性の解釈学」へと哲学的思索を展開しはじめ、それは、とくに人間の生を基調とする実存の思想へと尖鋭化されていった。けれどもこうした実存の思想はハイデッガーにとっては単なる実存的な地平にとどまらず、それはギリシア以来の存在論の伝統のなかでうけとめられて、存在そのものの問いを開発する問題につながりつなごめられる。あらゆる哲学的問いがそこから発源し、そこへと打ちかえされていくところ——それを実存にみとどけたとき、ハイデッガーにとって哲学は普遍的な現象学的存在論として現われ、その序曲が基礎的存在論として、われわれ自身がそれであるところの存在者すなわち現存在の解釈学に求められた。

こうして『存在と時間』における現存在の分析論は、存在を主題とする存在論的考究を具体的になしとげるために、人間存在のいくつかの本質的な実存現象（良心、死、負い目）について存在論的な解釈をほどこして、そもそも存在というものがそこから理解できるようになる地平を「時間」として証示しようとする道程を示していた。ところが既刊の『存在と時間』の実質的内容はむしろ実存的パトスに余りにも色どられていたために、哲学史家たちは一様に実存哲学の枠内でハイデッガーを論ずるようになった。こうした風潮に対して

ハイデッガーは少なからず抵抗しなければならなかったのである。

1933年——若くして思想界における世界の指導的地位をえたハイデッガーはこの年に世界歴史

杉田 泰一

の苛酷な運命にみまわれることになった。ナチスが実権を握ったこの年、彼はフライブルグ大学の総長に選出され、『ドイツ大学の自己主張』と題して講演を行ったのである。この講演は、当時の歴史的状况を加味すれば、当然のことながらナチスを擁護する立場をほのめかしていた。この時彼は43才であった。彼がどうしてナチスに加担することになったのか、このことについてはいまだ定かではない。

それにしてもハイデッガーは、1930年代の前半、哲学的には非常に寡黙になっている。この時期には哲学的著作らしいものはなにひとつ発表されなかった。そしてその後には公刊された彼の作品は既刊の『存在と時間』から予想されるような内容のものではなかった。そこにはむしろ立場の転回さえみられたのである。一時期哲学史家たちの議論はこの転回に集中したほどであった。それはともかく、後年のハイデッガーの論調は哲学的というよりもむしろ詩作的な色調さえおびていた。この偉大な哲学者の精神はおそらく臨終にいたるまで「存在」をめぐる戦いに挑んでいたことであろう。

世にハイデッガーに関する論文は数知れない。しかし詩人のように、言葉の一語一語を大切にす

## ハイデッガーについて

この哲学者が生前に公刊した著作は数少く、こうした著作からハイデッガー哲学の全貌を推し量ることは至難のわざであった。ところが近年来ハイデッガー全集70巻の刊行が計画され、すでにそのうちの1巻“Grundprobleme der Phänomenologie”<sup>\*</sup>が刊行された(図書館所蔵)。この著作は1927年に講義されたもので、すでに日本ではタイプ印刷の海賊版として研究者たちの間では広く読まれていたものである。今後ハイデッガーに関する研究はますます綿密になるであろうし、彼の哲学の全貌はやがて明らかにされ、哲学史のなかに正しく位置づけられることになるであろう。ハイデッガーの残光はまだまだその輝きを失うことはなさそうである。

追記、ハイデッガーの著作は、今までに公刊されたものはほとんど本学図書館に所蔵されている。翻訳書としては、主として理想社の「ハイデッガー選集」があるが、この選集も所蔵されている。なお初めてハイデッガー哲学をひもときたい人には、九鬼周造著『人間と実存』(初版1939年、岩波書店)(図書館所蔵)、とくにそのなかの「実存哲学」、「ハイデッガーの哲学」の二論文が適当だろうと思う。

(教育学部・哲学)

\* Gesamtausgabe, Abt. 2: Vorlesungen 1923 - 1944, Bd. 24: Die Grundprobleme der Phänomenologie. Frankfurt a. M., Klostermann, c1975.

### — 最近の寄贈図書から —

## 東名高速道路 基礎調査報告書

土 隆 一

東名高速道路が建設される際に、基礎となる地質調査、ボーリング調査、地盤調査、破壊試験や圧密試験、含水比試験など各種の土質試験結果を地域ごとにまとめたもので、静岡県東の小山地区から西の三ヶ日地区までの分、合計500余冊。

今まで理学部地球科学教室が日本道路公団静岡建設事務所から保管を依頼されていたが、このほど本学図書館へ寄贈されることになった。

高速道路という重要構築物のためもあるが地質調査はきわめて精度高く実施されており、静岡～清水間わずか15Kmの間に130本以上のボーリングがなされている。したがって、この資料を見ると、ちょうど静岡県の海岸部の東から西の端までの地下断面が眺められることになる。しかも都合のよいことには、東名高速道路は一般的には従来人家の少い、土地利用度の低い場所をえらんで通って

いる。こういうところは往々にして軟弱地盤地帯などのように住家が多ければ地震被害もきわめて大きいと予想される地域にあっている。そのため、そのような大被害予想地域の詳しい地質断面が得られるわけで、“遠州灘大地震”が云々される今日、地震防災の研究資料としてもきわめて役に立つ資料ということができる。

静岡県下のものがそっくりまとまっているのでとても便利というわけで、今までにも、市町村役場の人達、地質調査会社の人達など研究者以外の人達にも利用されてきた。今後も、地震防災関係は勿論、都市地盤の研究、平野の地質の研究の貴重な文献資料として活用されるにちがいない。なお、当時の航空写真図も添付されていることを記しておく。(理学部・地球科学教室)

### ■ 教官著作寄贈図書 (本館)

檀原 毅 (教養部)

大地を測る (出光科学叢書11)

(出光書店 昭和51)

適正規模論—自然・生態・人間— 菊地誠編著  
(檀原毅等執筆)

(日本放送出版協会 昭和51)

杉山 忠平 (教育学部)・加藤 一夫 (教養部)

アダム・スミスの経済学 サミュエル・ホランド著  
小林昇監修 杉山忠平・加藤一夫等訳

(東洋経済新報社 昭和51)

藤田 忠男 (教育学部)

現代教育基本論 藤田忠男編

(協同出版 昭和51)

船城 道雄 (教育学部)

格文法の原理—言語の意味と構造— C・J・フィルモア著  
田中春美・船城道雄訳

(三省堂 昭和50)

重田 澄男 (人文学部)

マルクス経済学方法論

(有斐閣 昭和50)

静岡大学教育学部附属浜松中学校教育研究会

学習目標の明確化と学習構造の転換

(明治図書 昭和51)

### ■ 寄 贈 (本館)

#### 日本学術会議

本年度から日本学術会議より資料の寄贈を受けることになりました。その第1回分は下記のとおりです。

- 第10期日本学術会議運営審議会付置委員会、常置委員会、特別委員会、研究連絡委員会委員名簿(1976年3月現在)
- 日本学術会議第70回総会資料綴
- 第473～476回運営審議会〔議事事項〕

# 利 用 統 計 昭和50年度 (本館)

〔表1〕利用者別統計

(コメントは、次ページにあります)

区 分	奉仕対象数 (人)	入館者数 (人)	閱 覧 出納冊	貸 出					文 献 複 写		相互貸借 冊	
				指定冊	開架冊	出納冊	合計冊	館内件	館外件			
学 部	人 文	371 (7.7%)	6,710 (10.4%)	1,818 (32.3%)	244 (5.4%)	1,102 (11.8%)	432 (30.2%)	1,778 (11.6%)	756 (27.5%)	50 (30.9%)	9 (60.0%)	
	教 育	893 (18.4%)	12,581 (19.5%)	1,697 (30.1%)	739 (16.3%)	2,283 (24.4%)	559 (39.1%)	3,581 (23.4%)	825 (30.0%)	33 (20.4%)	3 (20.0%)	
	理	261 (5.4%)	3,238 (5.0%)	201 (3.6%)	319 (7.0%)	664 (7.1%)	20 (1.4%)	1,003 (6.5%)	111 (4.0%)	39 (24.1%)	1 (6.7%)	
	農	264 (5.4%)	627 (1.0%)	37 (0.7%)	33 (0.7%)	115 (1.2%)	1 (0.1%)	149 (1.0%)	12 (0.4%)	11 (6.8%)	0 (0.0%)	
	教 養 部	人 文	460 (9.5%)	9,702 (15.0%)	881 (15.6%)	553 (12.2%)	1,340 (14.3%)	169 (11.8%)	2,062 (13.4%)	365 (13.3%)	0 (0.0%)	1 (6.7%)
		教 育	900 (18.6%)	11,570 (17.9%)	550 (9.8%)	815 (18.0%)	1,472 (15.7%)	142 (9.9%)	2,429 (15.8%)	214 (7.8%)	0 (0.0%)	1 (6.7%)
		理	334 (6.9%)	6,097 (9.5%)	114 (2.0%)	562 (12.4%)	716 (7.6%)	35 (2.4%)	1,313 (8.5%)	143 (5.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
		農	317 (6.5%)	3,294 (5.1%)	56 (1.0%)	279 (6.1%)	631 (6.8%)	19 (1.3%)	929 (6.1%)	96 (3.5%)	6 (3.7%)	0 (0.0%)
工		885 (18.3%)	10,131 (15.7%)	210 (3.7%)	979 (21.6%)	1,004 (10.7%)	26 (1.8%)	2,009 (13.1%)	185 (6.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
大学 院 生 専 攻 生 等	161 (3.3%)	588 (0.9%)	65 (1.2%)	15 (0.3%)	41 (0.4%)	29 (2.0%)	85 (0.6%)	45 (1.6%)	23 (14.2%)	0 (0.0%)		
小 計	4,846 (100.0%)	64,538 (100.0%)	5,629 (100.0%)	4,538 (100.0%)	9,368 (100.0%)	1,432 (100.0%)	15,338 (100.0%)	2,752 (100.0%)	162 (100.0%)	15 (100.0%)		
教 職 員	教 官	/	/	/	/	172	6,041	6,213	1,910	843	21	
	職 員	/	/	/	/	103	290	393	—	9	9	
	研 究 室	/	/	/	/	/	4,902	4,902	/	/	/	
	小 計	/	/	/	/	275	11,233	11,508	1,910	852	30	
学 外 者	/	312	380	/	/	/	/	/	/	/		
合 計	—	64,850	6,009	4,538	9,643	12,665	26,846	4,662	1,014	45		

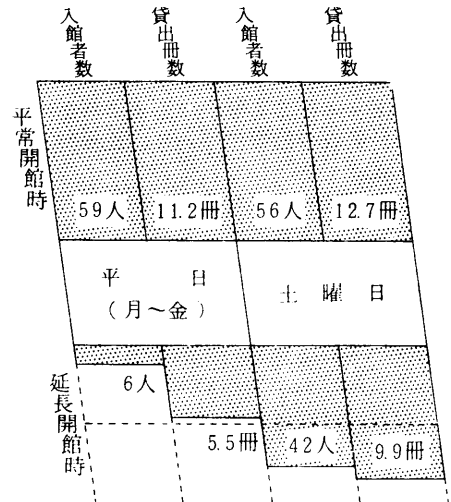
〔図1〕学生貸出冊数の推移 — 本館 —

年度	学生数	貸出冊数	開架	指定	閉架
45	4,073	10,028	4,948	4,196	884
46	4,029	9,997	4,618	3,620	1,759
47	4,126	7,080	3,840	2,336	1,000
48	4,668	6,929	3,779	2,358	792
49	4,586	10,761	5,785	3,764	1,212
50	4,846	15,338	9,368	4,538	1,432

表1は、48および49年度と同じ様式で作成してある。  
 №29、№32を参照のこと。

〔図2〕延長開館(試験期)の利用状態

※ 平常開館時間(平日9:00~17:00, 土9:00~12:00)と延長開館時間(平日17:00~19:30, 土12:00~16:00)との、1時間当りの利用状況の比率(平常時を100とした場合)



## コメント

### — 学生の利用について —

学生貸出冊数が48-49-50と順調な伸びを示している。その要因を考えてみると、49年度については貸出日数の増加があったので、そこに認め得ようが、50年度については、そうした変更は無く、にわかには見出し難い。特に開架図書の利用増加が著しいが、50年度新たに配架された学生用図書(49年度受入分は、受入の遅れから大部分年度の終りから50年度の始めにかけて配架された)は、ここ数年で最も少なかった。また人文学部関係で一部書庫から開架に出したが、ジュニアでは利用が増加しているものの、シニアでは増加せず逆に書庫のものが大幅に増加している。このことと51年度当初配架の学生用図書が多かったこと、および今4月より利用者の要望により昼休み中も貸出すようになったことにもかかわらず、今年の4・5月の貸出が大幅に減少していることを考えると、図書館側のサービスの増減と、利用度とは殆ど相関関係が無いように思えるし、検討をしてみる必要がある。

〈図2〉は、現在試験期に実施している延長開館の利用状況であるが、利用度という観点から、開館1時間当りの数値を取り上げてみた。入館者数をみると、平日の延長時は平常開館時の約10分の1しかないが、より利用し易いと思われる土曜日の午後のそれは午前中の約4分の3を示し、平日の午後と較べて殆ど同じである。これも、先のことをある程度裏付けているといえよう。

これらのことから、図書館の反省としては、単にサービスの量を増加するだけではなく、真に利用者の望む処のサービスを的確にキャッチして質的サービスを実施しなければならないと思う。

(運用係 望月記)

### ■ 附属図書館委員会報告 (昭和50年度)

- (第6回)とき: 51・1・24 ところ: 本部
- (1) 学生用図書購入費(追加配分)について館長から説明があり、図書館より配布した資料により、各学部の意向が委員より開陳され、審議の結果、各配分額が承認された。
  - (2) 法経短大委員(現在は、オブザーバー)の正式委員化について館長より発議があり、議題としてとりあげることが、了承された。
  - (3) 会計監査の結果について、館長から報告がなされた。
  - (4) 学内規則を越えた教官の長期多数貸出について検討し、改善に努めることとした。
  - (5) 日々雇用職員の補充について審議された。

(第7回)とき: 51・3・9 ところ: 本部

- (1) 法経短大の正式構成員について検討され、51年度で十分審議し、52年度より正式構成員とし

て加わっていただくよう努力することを、了承した。

### ■ 附属図書館委員会構成委員 (昭和51年度)

図書館長	中沢 正寿
人文学部	小沢 康彦 名和 鉄郎
教育学部	角替 弘志 棚橋 克弥
理学部	渋谷 元一 宇津野峻司
工学部	井本 文夫 別所 照彦
農学部	森 見二 岡本 茂
教養部	上田 伝明 釜屋 修
電子研	熊川 征司 助川 徳三
法経短大	青木 義明 (オブザーバー)
事務局長	根本 松彦

### お知らせ (本館)

- (1) ゼロックスによる文献複写料金が4月1日より次のように変わりました。  
学内 30→40円、学外 35→45円
- (2) 昼休み(12:00~13:00)の間も、窓口サービスを行うことになりました。大いに御利用下さい。
- (3) 図書持ち込み手続が変わりました。入館の際には、かならず受付でその旨申し出て、持ち込む本を提示し、1冊につき1枚の持ち込み票を受け取って下さい。退館する際は、持ち出す図書を提示し、持ち込み票を返して下さい。
- (4) 夏期休暇中の他の図書館利用には、紹介状を発行しますから、窓口申し出て下さい。
- (5) 夏期休暇中、次の期間、閉館します。
  1. 7月26日(月)~31日(土): 開架図書点検のため
  2. 8月25日(水)~31日(火): 閲覧室整備のため
- (6) 夏期休暇中の長期貸出図書について  
返却期限 9月1日(水)~3日(金)
- (7) 前期試験のため、開館時間を延長します。  
期間 9月4日(土)~22日(水)  
時間 月~金 17:00~19:30  
土 12:00~16:00

### ■ 人事移動 (本館)

配置換(51・5・1付)  
友田康夫(総務係長←本部経理課用度係長)  
影山鉄男(総務係長←本部主計課総務系主任)  
辞職(51・3・30付)  
国分豊子(総務係)(51・4・1付 農学部採用)

### ■ 昭和51年度編集委員

角替(教育学部)・宇津野(理学部)  
岩本・山本・吉田(政)・川原(図書館)  
〈編集後記〉図書館通信の本年度発行予定は、年4回、4P(うち1回は6P)です。

お願い 図書館では、本学関係の出版物を収集しています。公私にかかわらず、出版されたおりに、ご連絡くださるようお願いいたします。